

# 日本経済新聞

## がんと折り合う養老孟司先生 治療法の進化も後押しに



恩師である養老孟司先生の小細胞肺がんが再発し、東大病院で治療を受けていることは、この連載でも何度か触れました。その治療経過などをまとめた共著「病氣と折り合う芸がいる」(エクスナレッジ)が今月22日に発売されました。

養老先生の心筋梗塞を2020年に私が診断し、緊急治療を受けてもらったことを機に、共著「養老先生、病院へ行く」「養老先生、再び病院へ行く」が生まれました。その後、小細胞肺がんが24年に見つかり、3冊目「養老先生、がんになる」を出版しました。一旦ほぼ消失したがんが今年春に再発、今回の出版に至りました。

先生の原稿を読んで驚いたのは、医療との距離がグッと近くなったことです。かつて医療に否定的だった養老先生が、東大病院での自らの治療について面白おかしく語り始めたのです。タイトルにある「病氣と折り合う芸」はそういうことなのだ、と納得しました。

養老先生は4回入院し、抗がん剤と免疫チェックポイント阻害剤による治療を受けました。以来、免疫チェックポイント阻害剤の点滴のみを外来で受けています。外来での点滴は初めての経験なので、それがおもしろいと述べています。

以前の連載で紹介したのと同様に、新刊でも「家族のために治療を受ける」という言い方をしています。養老先生の変化が感じられます。

変化の背景の一つとして、医療の進歩があると考えています。かつては抗がん剤の副作用が激しく、途中で治療をやめたケースや副作用で命を落とした患者も少なくありませんでした。現在、副作用は明らかに減っていますし、全身転移があっても、薬物治療を続けながら5年以上元気に過ごしている方も増えています。

逆に、耐えられないほどつらい治療であれば、養老先生はご家族に治療をやめると宣言したでしょうし、ご家族もそれを受け入れたと思います。肺がんの治療を通して、養老先生とご家族とのきずなが強くなったと感じています。

養老先生は「一人称の死、が存在しない」と語ります。同じように「病氣も自分だけのものではない」と気づかれたのだと思います。

かねてから「変わらない自分」など存在しないと述べてこられました。肺がんという新しい経験を通して、先生も変わったのだと思います。東大病院がホスピタリティーにあふれる「よい病院」に生まれかわり、がん治療の副作用もほとんどなかったことが、先生の変化を後押ししたはずで

2025年12月24日